

同労者であるシラスとテモテはしばらくマケドニヤのベレヤに留まっていた(17:14~15)。パウロは人をやって、アテネにくるようにと伝えてあったのですが、ようやくして二人はコリントに辿り着きました。パウロは御言葉を伝えることに専念しました。そして、イエスがキリスト(救い主)であることをユダヤ人達に宣言したのです。

②**暴言を吐くユダヤ人(6)「しかし、彼らが反抗して暴言を吐いたので、パウロは着物を振り払って、『あなたがたの血は、あなたがたの頭上にふりかけられ。私には責任がない。今から私は異邦人のほうへ行く』と言った。」**

ユダヤ人の中には、パウロの伝えるメッセージに反発し、暴言を吐いたりする人々がありました。かつては自らも同じような立場でしたが、キリストに出会ったパウロは熱心に愛の福音を語っていました。しかし、福音に耳を貸さない彼らに対し、決然と「あなたがたの血は、あなたがたの頭上にふりかけられ」と言い伝えました。つまり、語るべきことをユダヤ人達に語ったパウロは、キリストを受け入れない者の責任は本人にあることを厳しく語り、異邦人伝道に力を注ぐと言ったのです。

③**ユストとクリスポ(7~8)「そして、そこを去って、神を敬うテオ・ユストという人の家に行った。その家は会堂の隣であった。会堂管理者クリスポは、一家をあげて主を信じた。また、多くのコリント人も聞いて信じ、バプテスマを受けた。」**

コリントでも主の備えがありました。ユダヤ教会堂の隣にある家の人で、クリスチャンとなっていたユストという人で、パウロは歓迎されました。また、会堂管理者のクリスポの一家は揃って信者となりました。多くの人々が主の前に出て、信仰告白をし、バプテスマ(洗礼)を受けたのでした。

3. コリントに腰を据え(9~11 節)

①**恐れずに語れ(9)「ある夜、主は幻によってパウロに、『恐れなさい、語り続けなさい。黙ってはいけない。』」**

パウロに主が幻をよって語られました。「恐れずに語り続けよ。黙ってはいけない」。反対する者たちに屈してはならないということです。

②**わたしの民が(10)「『わたしがあなたとともにいるのだ。だれもあなたを襲って、危害を加える者はない。この町には、わたしの民がたくさんいるから』と言われた。」**

ご命令の理由は、i.主が共にいてくださる、ii.危害を加える者はない、iii.この町には主の民がたくさんいる、というものでした。確信に溢れた、パウロでさえ、このような励ましをいただく必要があったのです。

③**一年半コリントに(11)「そこでパウロは、一年半ここに腰を据えて、彼らの間で神のことばを教え続けた。」**

パウロは伝道旅行において、一ヶ所には数か月滞在することが普通でした。しかし、彼は主の励ましをいただいたこともあって、コリントには一年半、腰を据えて御言葉のご奉仕を続けたのでした。

《結論》

今朝の聖書箇所から、私たちは二つのことを学んでいきたいと思えます。

第一は、パウロがアクラとプリスキラ夫婦に出会わせられ、彼らと天幕作りをしながら、宣教をしていったということです。数年前に召された矢島徹郎先生が「パウロの選択」という本を出されましたが、そこには自活伝道について書かれています。ご自分が塾などをしながら、伝道をされてきたことをパウロから学んで行ってきたと証しておられるのです。実を言うと、私も40年余りの伝道者生活においては、ほとんどの年月、副業をしつつ宣教をしてきました。こちらに来て最初の10年間は新聞配達をしました。有秋台団地の階段を上り下りしました。また、幼稚園での働きを13年間しました。週2回、牧師として働きましたが、子供達と遊ぶこと、礼拝をささげること、朝には先生達と聖書を学び、お母さん方と聖書を学ぶこともしました。この働きは、まさに主が備えてくださったもので、報酬をいただきながら他では得られない宣教の機会を与えられました。世の中の人々と直接に接することができました。教会員になった方々もいます。また、塾をやっていたこともあります。教会がやっていた英会話クラスは、私共の経済とは関係ありませんでしたが、多くの人々との出会いのきっかけとなりました。また、病気をする前までの20年間地域新聞配達を夫婦で行いました。なぜ、これらの事を連ねて述べたかということ、開拓伝道における自活伝道は、社会に食い込むために有効な手段の一つだと実感しているからです。パウロは天幕作りをしながら、宣教する道を敢えて選んだのだと思います。その地に生きる人々と出会い、親しく付き合い、問題や悩みを聞き、そのなかでキリストを伝えていたことでしょう。全国で世の中の働きをしている伝道者のために祈りましょう。また、それが用いられますように。フルタイムの伝道者になれるようにも祈りましょう。

第二に、主が共にいてくださること、危害を与える者はないと言われた後に、「この町には、わたしの民がたくさんいるから」と励まされた点についてです。日本長老教会の四日市教会の元牧師の堀越暢治先生は、四日市に行かれてから十年間は砂を噛むような日々であったそうです。しかし、ある時御言葉をいただいたということです。それが「この町には、わたしの民がたくさんいる」でした。それを主からの励ましであり約束だと受け取った先生は伝道に邁進し、四日市の少し中に入った地域において、多くの人々が救われて行きました。そして、二百人もの人々が礼拝参加する教会となっていったのです。ここで、教えられたいことは、第一に堀越先生が御言葉を自分へ告げられたものとしていただいていたということです。御言葉を他人事として読んだり、半信半疑で読んでいれば、そうなりません。主は御言葉を通して、私たちに語られるのです。そのつもりで読んでいきましょう。その二は、この御言葉は姉ヶ崎の有秋台地域にある姉ヶ崎キリスト教会にもあてはまるということです。「この町にも、主の民はたくさんいる」と信じて祈っていきましょう。姉ヶ崎、袖ヶ浦、木更津、君津、五井と広がる地域において、主の民は大勢いて、私達の教会を用いて、救いの業を与えてくださると信じ、祈っていかうではありませんか。